

た當時から獨り著者の懐いて實現しなかつたこの史料集が、今出版されて斯界に好評を以て迎へられてゐるといふのもこの學界の傾向に投合するものであらう。更にいへばそれは大正十一年に成りし福井縣史の史料集といふだけではなく、この史料集によつて新しい福井縣史が顯みられるといふ意味を持つものであらう。(菊判、本文八四五頁、圖版四十二葉、三秀社發行、定價九圓)〔福尾〕

●春日神社文書 第貳

去昭和三年の春始めて公刊せられた春日神社文書の第一巻は嘗にその豊富なる内容に於てのみでなく、その整備せる編纂體例に於て、正にこの種の出版中の白眉と稱せらるべきものであつた。殊にその巻末に人名地名件名等の詳細な索引を附したことは、大日本古文書の編纂に於てさへも未だ能くなし得なかつたところ、その勞苦とその親切とは永く研究者の感謝を受くるに値するものであつたが、この度同じ綿密の用意を以て編纂せられた續編が前巻の公刊以後五年にして漸く出版せられるに至つた。前巻に收められた六百幾通の文書は既に早く一度神社に於て整理せられてあつたものであるに對し、この度のもものは多く反古同様に篋底に藏せられてゐたものといへば、その整理と原稿作成の苦心は前巻に倍するものがあつたであらう。併しそれだけにまた、その内容はこの度始めて世に紹介せらるゝわけで本書公刊の意義は前冊よりも一層大きいといひえよう、殊に舊牧職であつた正眞院家を始め現舊社家に傳へられた文書の

併せて載録せられたことは最もよろこばしいことである。

今就中注意すべきものは二三を擧ぐれば、興福寺叢會の議によつて春日野參道の兩側に植うべき柳櫻各一本を塔頭諸院に課した建長三年の請定、同じく叢會の議に基く廻廊修造石並に形本經藏石の各支配注文の如きは、その事柄の些末なるにもか、はらず興味ある文書であり、また近世能樂三座がその本據を江戸に遷さんとした前後、神事の關念を憂へて、しきりに之を止めんとした興福寺五師役者連署の奉行所宛口上書の如き、他に史料乏しきこの方面の研究に裨益するところが多いであらう。而して若し社領の莊園やその諸職その他一般社會經濟史的史料に至つてはもとより一々枚舉せらるべくもない。本書中に現はれる莊園のみを列舉しても三百の餘に上るであらう。正眞院家舊藏のもの、中では擁津垂水西牧に關する後白河院近衛基通及源義經等の西海道追討使兵士糧米停止に就ての文書が最も珍しいものである。(總通數七百九十七(菊判千九百九頁)圖版十六、索引六十二頁、東京上田泰文堂發行、定價未詳)〔柴田〕

●世外井上公傳 五卷

世外井上馨侯に關しては、明治四十年、中原邦平氏によつて「井上伯傳」編まれ、大正十年、澤田章氏編にかゝる「世外侯事歴維新財政談」が公刊せられた。併し、前者は明治戊辰の役の時を以て筆を擱き、世外侯眞の活躍期なる明治以後を缺き、書の名付けられたるところと、其内容甚だしき隔りを有し、僅かに、侯が幕末期に於て既に後年雄飛すべき素質を現はし始め